

時計に支配されるのではなく、時計が所有者に仕えなくてはならないのです——

ブルー

Bernhard Lederer

ベルナルド・レデラー

ブルー社長兼テクニカルディレクター。1958年生まれ、87年、AHCI(独立時計師協会)に加入。2000年にブルーを設立。2005年、ヌーシャテル近郊に工務を移転、パーツの内装化に取り組み、年産400~500本の体制を整える。現在、自社製超薄キャリバーを開発中。

西川節子：写真 鈴木幸也(本誌)：取材・文
Photograph by Setsuko Nishikawa Text by Yukiya Suzuki (Chronos-Japan)

ブルーの社長、ベルナルド・レデラー氏は、自らのブランドを魚に例えて曰く、「常に『目的に向かって生き生きと泳ぐ魚』でありたい」と。「生きていく魚は川の流れに逆らって泳いでいますが、死んだ魚はただ流されるだけです。私たちも、伝統に流されるだけでなく、今生きている21世紀という時代性を時計作りで反映させたいのです。例えば、今日では異なるタイムゾーンを頻繁に行き来する人がいます。そういう人にとっては、GMT機能や時差修正機能は高い実用性を発揮します。私たちの作るレトログラードは、従来



ブルー・カルテット

時・分・秒・日付の4つの表示が文字盤上に立体的に配置されているところから、イタリア語で四重奏を意味する「カルテット」という名を持つ。センターセコンドがミニッツブリッジの下を通る3次元文字盤も新しい試み。繊細なレトログラード分針に7度の角度をつけることで実現。SS(直径42mm)。自動巻き(Cal.BLU orbit, ETA Cal.2892A2ベース)。150万1500円。

のものとして逆戻しもできます。それによって、時差の修正が格段に容易になりました。このような視点を大切にしたいのです。すなわち、時計に支配されるのではなく、時計が所有者に仕えなくてはならないのです」。

しかし、ブルーを象徴するマジエス テイトゥールピヨンMT3に見られるように、同社はトゥールピヨンも手掛ける。レデラー氏が語る哲学とトゥールピヨンは一見矛盾しているようにも見えるが、その点を問いついた。

「確かに現在、トゥールピヨンに実用性はほとんどありません。しかし、私がトゥールピヨンを作ったのは3つの理由があります。ひとつは、時刻表示機能を構造的に追求したかったこと。具体的には、秒・分・時表示を異なる層で回転させて、いわば3つのトゥールピヨン(渦巻き)表示を実現したかったのです。ふたつ目は、私自身もともと時計コレクターであり、愛好家であった主観的な理由からです。そして最後の理由が、世界にふたつしか現存しないハーフライングトゥールピヨンをもう一度、現行品として蘇らせ

たかったのです」

まさに時計師としての探求心が生んだのがMT3ということができるが、従来に比べて、トゥールピヨン機構に消費されるトルクが少ないという利点を持つ。ゼンマイの動力を10とすると、伝統的なトゥールピヨンは8、フライイングトゥールピヨンは5をキャリッジの回転に費やす。それに対して、受けのみで脱進機と調速機を支えているハーフライングトゥールピヨンは1の動力しか使わないという。その結果、安定したトルクが脱進調速機に供給され、テンプの振り角を常に320°/340度で維持できるため、日常使いにおける外乱の影響を受けにくい。直径12mmという大きなテンワを毎秒4振動という超低振動で回転させている根拠はここにある。

安易に伝統に流されず、かといって闇雲に逆らうだけでもない。ブルーの時計作りの根底には、あくまで使用者に奉仕する時計作りという哲学がある。意匠や機構の強烈な個性に目を奪われがちだが、この点において、ブルーは至極真つ当な機械式時計である。